

♡ はじめに

今、核家族化や地域とのつながりの希薄化などにより
身近に相談相手がおらず、子育てに不安や負担を感じている
子育て家庭も少なくないと思います。

一方で、広島県内では、ママやパパの気持ちに寄り添い、
子育てを応援してくださる方や、仲間の輪がどんどん広がっています。

こうした様々な活動をもっと皆さんに知っていただくため、
この度、県の子育てポータルサイト「イクちゃんネット」に掲載している活動を
「支援のカタチ～地域みんなで子育て応援!」として冊子にまとめました。

子育て真っ最中の方には、身近な子育て支援を知るきっかけとなり、
支援者やこれから子育て支援に関わりたい方には、
つながり作りのきっかけとなるよう願っています。

県内には、この冊子でご紹介している活動のほかにも、様々な支援のカタチがあります。
すべての子供が健やかに夢を育むことができるよう
地域みんなで子育て応援の輪を、さらに広げていきましょう!





子育てひろば ころろ
山内 美緒さん

座談会メンバー紹介

子育て中の親子が抱える不安・問題を、
ていねいに受け止め、
解決の糸口を探りたい



子どもコミュニティネットひろしま代表
小笠原 由季恵さん



みらい子育てネット
きゅうびいmama代表
佐藤 恒子さん



子育ておたがいさま〜ズ
塩成 聖恵さん



私が考える“子育て支援・応援のカタチ”

子育て支援座談会

子育て支援を始めるきっかけは何だったのか、活動してみてどうだったのか。
実際に子育て支援活動に携わる4名の方に話し合ってもらいました。

子育て支援を 始めたきっかけは？

塩成さん…私は夫の転勤で東京から広島へ来たんですが、東京での子育ては夫が仕事で忙しく子供と2人きり…、広島へ来ても全然友人がいなかったの、これは作らねば！と公民館のサークルで友人探しをしたんです。でも思うものがなくて…それなら自分で作ろうと、親子が集う場所としてオープンスペースの立ち上げに参加しました。一番困ったのが場所代が払えないことだったので、公民館とタイアップしてやってみました。当時はお金をいただくという概念もなかったのが無料。でもお金はないから、自分の子が使っていたおもちゃを提供したり、公民館から呼びかけてもらい、不要になったおもちゃを集めたり。そうして10年くらい続けましたね。

佐藤さん…私の場合は14年前から、支援というかボランティア

んでいる親子を見ても暇でないなあと思っていたんです。ところがいざ自分が子供を産むと、暇で公園にいたわけじゃないんだ！と気付くわけです。こっちの世界に来ると全然違うじゃない。全部自分でやらないといけないし、相手は言葉も通じないし…。自分の娘が私の立場になったとき、私と同じ状況だったら嫌だな、その頃に何かちょっと変わっていたら嬉しいなと思いき、動き始めました。子育ての情報誌づくりに参加したり、子育てサークルに入ってみたり。その頃、公民館がオープンスペースを作る話があって、スタップになりませんか？と誘われたんです。でもそこもお金がなく、スタップ3名で他のサークルでパネルシアター(動く紙芝居)を行い、出稼ぎみたいにあちこちで少しずつお金を稼いでオープンスペースに還元しようという活動を始めました。結局、そのお金は受け取れないと言われたんですが…。で

活動です。自分が親になった頃、尾道では親子サークルや広場が少なく、子供を連れて行ける場所もあまりありませんでした。第1子が生まれた時にはママ友もおらず、1日家にいるとストレスも溜まりますから、児童館に通っていました。そこには当時「母親クラブ」と呼ばれていたものがあって、その代表の方がいなくなるのでやらないかと誘われて始めたんです。児童館に所属している感じですね。はじめの頃は子育て仲間と一緒に、お母さんが第二子と遊んでいる時に下の子を隣の部屋で見ている状態でしたが、ママ達への支援も大切だと思い、本格的にお母さん支援をスタートさせました。その後児童館から外れることになって、細々とですが親子サークルや先生を呼ぶでの講演会などの活動を続けています。

山内さん…そうなんです。私自身もともとそんなに子供好きというわけではなく、公園で遊ぶも、そうして色々な場所に出前する小さなグループとして活動したことで、様々な団体とつながりが持てましたね。

小笠原さん…山内さんともそんな中で知り合いましたもんね。私を感じていたのは、子供は自分の意思だけで生きるの、難しいということ。親の意を強く受けて育つこと、そのことにとってもストレスを感じていました。だから自分の子供は自分なりに生きてほしいと思っていたんです。『子供がいかに自分らしく生きていくか』まさにそこがスタートで、28年前から子供支援を始めました。子供自身が豊かに育つという部分から親子劇場に入り、子供がいかに子供らしく生きられるかの支援活動を続けてきたんです。そこで実感したことは、子供が変わると親が変わるということ。でも、10年くらい前から子供はこんなに変わっているのに親はそれに気付かない、ということに気付いたん

です。そこで、これは子供の支援
だけじゃなく、親への支援も必
要だと感じました。そこから「子
育ておたがいきま〜ズ」の活動
を手伝いながら、団体としては
5〜6年前から月に2回、親子
の場を作ったのが子育て支援の
最初です。たしかに社会環境が
変わったので親も変わったと思
います。環境が良すぎるから配
慮推察する余地がない。でもそ
ういう環境で子育てをしなけれ
ばならない親達を見ながら、今
は逆に学ばせてもらっています。

支援活動をしていて 感じることは？

山内さん…私が子育てを始め
た頃、家でもパソコンを買いイン
ターネットを利用し始めまし
た。その頃にも子育て掲示板と
いうのはあって、あせもの薬はど
れがいいかとか、そこから得た情
報が役に立つことはいくつかは
あったんです。でも今は格段に
情報が増えて便利になりました
よね。それなのに何を信じていい

ママ達にとって、広場は安心な場所 成長できる場所になっていると思う

のか逆に迷っている人がとても
多いなと感じます。便利になっ
たぶん何かしらが不便になった
など。利用者の方たちというい
ろお話しをするんですが、直接
会って話した相手から言われた
言葉というのは安心できるみた
いだなど、ママたちを見ていて思
います。



塩成さん…それから、私たちが
子育てしていた時代は外遊びが
できたけど、今は地域のひとの
つながりもないし、危険もあつた

りするから、こういう広場の方
が安心感があるのかなと思いま
す。例えば台風の時も、家に子
供と2人だけだと不安だから
と、やって来る人も多いんです
よ。誰かがいる安心感があるん
でしょうね。だから警報が出て
も開けています(笑)

佐藤さん…すごいですね！でも
ママ達にはありがたいですね。私
が主宰している親子サークルは、
同じメンバーで1年間過ごしま
す。子育て広場に行かない人や、
行政サービスに馴染めなかった
人、転勤族の方にも参加してほ
らいたいと思っています。中には
コミュニケーションが苦手な方も
いるので、1年間メンバーが緒
だと安心感もあるんです。そう
して1年を通じて関わることで
元気になったり、人のお世話ま
でしてくれるようになったりし

現代のママ達の 子育てに思うことは？

小笠原さん…今は、小さい時か
らの色々な体験をする機会が
少なくなっているの、「子育て
」という初めての体験への不
安感が大きいですね。だから
逆に、ちょっとしたことで自信
につながるのかな。怖いのはネッ
ト上の不確かな情報を信じて

実行していること。でも昔の非
常識が今の常識になっているこ
ともあるから、私たちが一概には
言えないですね。育児とスマホ
の関係だって、何が正しくて何
が間違いかわからないことも増
えてきたから大変だなと思うこ
とはありますね。

佐藤さん…でも、他の人を見て
直接学べるというのはこういう
広場の良いところですよ。本
とかネットではできないことで
すからね。

塩成さん…それで言うと、子育
て広場などでいろいろな親子と
一緒に過ごしてみると、お互いか
ら学ぶことも多いようですね。
ここではママにお茶を飲みなが
らゆっくりしてもらい、その間、
少しお子さんから離れてもら
う。そうすると、人見知りをし

たらどれだけ泣くかがわかるん
ですよ。ママにとっても、ほかの
ママはあやつてあやすんだと参
考にもなりますから。

山内さん…周りのママがあやし
てくれたりもしますね。誰かの
子供が立って歩けたことをみん
なで応援したりも。そういうの
を見ると嬉しくなります。



普段の生活からできる 子育て支援とは？

山内さん…何か、特別な資格を
持つていなくても、子育て支援つ
て誰にでもできることじゃない
かなと思います。

塩成さん…声を掛け合うのも
子育て支援かもしれないし。

小笠原さん…声を掛けつらい時
は心の中で親子連れを見て可
愛いと思うことから何か変わ
るかも。例えば子供を見るとな
んとなく微笑んでしまうでしょ
う。その目線の輪が広がってい
くことは、子育てしている人にと
って温かいはず。周りに気を遣
いながら子育てしているかもし
れないですからね。

自分が子育てで経験してきたこと

その気持ちで他の人にもより添えれば



地域で活躍する“子育て支援者”のみなさん

オープンスペースを 手伝う縁の下の力持ち

毎月第1・3金曜、広島市中央公民館で実施されるオープンスペース（乳幼児と母親が集える場）の朝の準備風景の中に、酒井澄さんの姿はあります。マットを敷いたり、オモチャや机、本棚などを運んだり、常設のスペースではないため、準備は結構大変な作業。そんな作業を黙々とこなすのが酒井さんです。

きっかけは7年ほど前。民生委員として活動する中でオープンスペースの存在を知り、何箇所が見学されました。その中の1つだった中央公民館で、朝



▲自作の机について説明する酒井さん



さかい 澄さん

7年ほど前から、オープンスペースの準備をボランティアで手伝いに来ている。

の準備が大変なことを実感し、以来手伝いに来られています。また、荷物出しだけにどまらず、安全性を考えて子供用の机や椅子も自作し、オープンスペースへ提供されているそう。実は酒井さん、家ではお母さんの介護をされているそうですが、時間を作り何年も手伝いに通われているんです。「私は動ける範囲で動いているだけです。だから何年も続けることが目標でもないし、世の中の変化に合わせて登場する人、退場する人がいていいと思うんです」と笑う酒井さん。準備が終わればサッと帰宅するという縁の下の力持ち。肩肘張らないその姿勢が、長く続ける秘訣かもしれません。

大好きな場所だから、 お手伝いしたい！

大竹市の自然豊かな場所に建つログハウスは、NPO法人子育てハッピーネットほのぼの館。芝生と大型遊具もあり、広島や岩国からなど、いつも多くの親子が訪れ賑わいます。そこで副理事長を務めるのが、中野友加さん。2児のママです。不安を持ちながら子育てをしているママ達に、子供と楽しんで過ごせる施設を作りたいという前理事長の思いと、休館していた児童館の施設を活用したいという大竹市の思いがマッチングして誕生した「松ヶ原こど

▲子供達とイベントを楽しむ中野さん



ゆか 友加さん
なかの 中野さん

利用者であったママの立場から、運営スタッフへ。現在は副理事長として働いている。

も館」。中野さんも開館当初は子育て真っ最中で、こういう場所ができたと聞いてよく利用していたママの1人でした。そんな中、「一緒に働いてみたい？」と誘われ、子育てもひと段落した時期でもあったので、今まで好きでずっと通っていたこの場所です。今度は逆にお手伝いしたい！と運営スタッフへと転身したのです。「ここには子育て中のスタッフもいますが、みんな自分の子育てを大切にしながら、それぞれのスタイルで働いています。今後もママ達にとってホッともらえるスペースであり続けたいですね」と中野さん。利用者目線を持った彼女だからこそ、運営にもきつと、それが生きていくはずなんです。

孤食の子供達に あたたかいご飯を

親が仕事で忙しく夕食を1人で食べている子供、カップ麺やお菓子が夕食になっている子供：そんな子供達に月に1回、2回でも栄養バランスのとれた食事を提供したいと、福山市に「そらまめこども食堂」をオープンさせた藤井彩加さんと森原舞さん。食材の提供や寄付金をホームページで呼びかけ、市内のコミュニティセンターで幼児〜高校生の子供達に無料で提供しています。

始まりは藤井さんがテレビで観た「こども食堂」の特集。身近にもこうした状況があるのだ



▲調理中の藤井さん(左)と森原さん(右)



ふじい 彩加さん / あやか 藤井さん
まい 舞さん / もりほら 森原さん

藤井さんは子供服販売、森原さんはエステティシャンという仕事を持ちながら、子供達のためにこども食堂を運営する。

親子が一緒に楽しみ、 成長できる場を提供

親子を対象にBBQやキャンプ、田舎暮らし体験などの自然体験活動を行う「ハンターキッズ」。君田にある拠点スペースを中心に、県内各地でバラエティに富んだアウトドア活動を展開しています。その代表を務めるのが、青木俊介さん。

現在は3児のパパである青木さんですが、最初の子育ては寝付かない子供に夫婦共に眠れない日々が続く、精神的に疲弊していたと振り返ります。そんな時、夫婦をキャンプに誘ってくれたのが友人達でした。キャンプでも子供の夜泣きは相変

▲君田冒険レジャーズでのキャンプの様子



しゅんすけ 俊介さん
あおき 青木さん

普段は総務・人事を担当するサラリーマンで3児のパパ。自身の経験を生かすべく、2011年、ハンターキッズを設立。

わらずでしたが、友人達がサポートしてくれ、久しぶりに2人で笑い合う時間が持てたそう。その日の経験から、育児に疲れている親への抛り所となりえる場所の必要性を感じ、サークル設立を決意。今では家族での参加や普段なかなかアウトドア体験ができない母子家庭の親子の参加など、どの活動も大人気です。また、失敗を通して成長していく子供達のたくましさはもちろん、大人同士が語り合う場を設けているのも、青木さん流のポイント。今後は、サークル自体の盛り上げはもちろん、アウトドアのスキルを対防災のスキルとしても活用できるような活動にも取り組みたいと話してくれました。



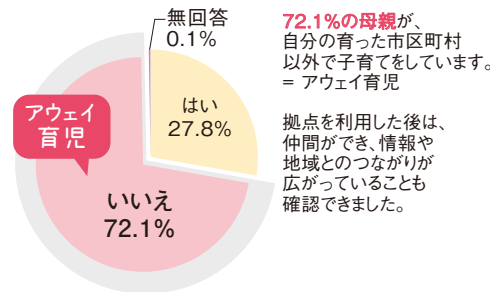
子育てママのリアルボイス

多くの子育て中のママは、もともと自分が育った地域以外で子育てしています。身近に子育てを相談したり、預けたりできる環境が少なく、その分、周囲の温かい言葉が心の支えになっているようです。子育て中のママを取り巻く環境と生の声をお伝えします。

子

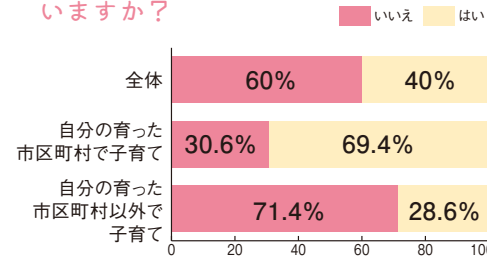
育て中のママが求める支援には、親子をサポートする施設や制度の充実に加え、もっと身近にいる人たちの仲間作りや声掛けが子育ての励みになっていることが分かりました。「地域子育て支援拠点事業」に関するアンケート調査2015[※]によると、「自分の育った市区町村で子育てする母親27.8%に対し、「自分の育った市区町村以外で子育てする母親」では72.1%に達しており、地域とのつながりが薄いため、子育ての手助けが不足。子育て家庭の孤立や育児不安の解消等を図る身近な相談・交流の場所を求めていることが分かります。また(公財)ひろしまこども夢財団が調査した「乳幼児の子育てにおける母親の意識に関するアンケート」の結果から、周囲のちょっとした心遣いが大きな励みにもなっているということがわかりました。他人からの「感謝の気持ち」「いたわり」「ねぎらい」といった、何気ないひと言葉や心配りが子育て中のママの自信ややる気につながっているようです。

Q.あなたが育った市区町村で、現在子育てをしていますか？

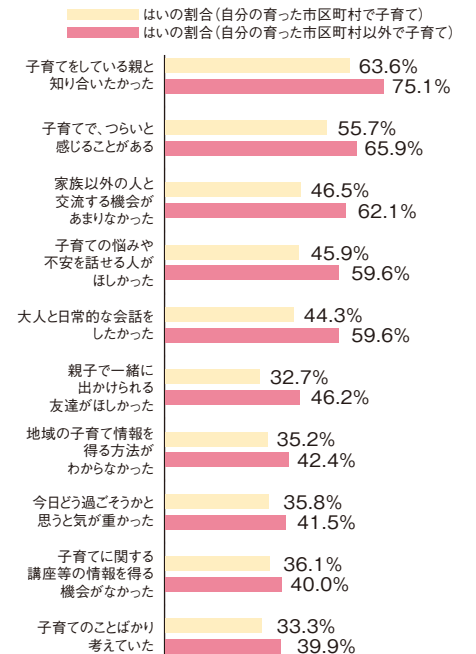


※2015(平成27)年11月1日～11月30日
全国の地域子育て支援拠点利用者2,400人に対して実施

Q.近所で子供を預かってくれる人はいますか？



Q.子育て支援拠点を利用する前のあなたの子育て状況をお答えください。



※「地域子育て支援拠点事業に関するアンケート調査2015」NPO法人子育てひろば全国連絡協議会より引用



イクちゃんネット パパママアンケート

イクちゃんネットアンケートより
(2017.1.29～2017.2.1)

広島県の子ども
元気いっぱいキャラクター
イクちゃん

かけてもらったうれしい言葉

- 幸せって顔に書いてあるね。と子供について言ってもらって、子育てを肯定してもらえたように嬉しかった。(40代3児のママ)
- 笑顔が良いね。3人共そっくりよ、ママ。(40代3児のママ)

されてうれしかった行動

- ずっと二人目の妊娠を待っている人に、赤ちゃんを抱かせてお願ひされ、本当に愛情深く抱いてもらった。(40代3児のママ)
- 1歳未満の子供を連れていたら、可愛いねえ、大変だけど頑張ってるね、と褒められた。(30代2児のママ)
- イヤイヤ期のカンシヤクで自分自身が追い込まれていたとき、子育て支援センターの方の「よく頑張ってるねえ。遠慮せずに、またいつでも遊びに来てね。」という言葉。(40代2児のママ)
- 駐車場で迷子になり、泣き声を頼りに2人の子を連れて歩き回っていたら、高齢の女性が抱っこしてくれました。(40代3児のママ)

こんな人が身近にいたらいいのになあ

- 赤ちゃんに子供を乗せて出かけた時にドアを開けてくれた。とてもありがたかったし、うれしかった。(20代生後2カ月児のママ)
- ベビーカーにお断りの食堂で4カ月の赤子を抱いて食事をとっていたら、食事を終えたお客さんが私が食べ終わるまで赤子を抱っこしてくれた。(40代3児のママ)
- ちょっとしたことでも気軽にお願いできるボランティア。(40代3児のママ)

● 子供好きなおばちゃんやおばあちゃん。時間がある時に少しでも、子供を外遊びに連れて行ってくれる人。(30代2児のママ)

● 仕事で遅くなることが多いので、もしもの時に頼るように、子供に言える近所の人。(40代3児のママ)

